
R.T.R.

有華 桜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R・T・R・

【Nコード】

N2166D

【作者名】

有華 桜

【あらすじ】

今年で二十五歳を迎える青年・戒道孝祐は、まともな職にも就けないまま、自堕落な日々を繰り返していた。もうすぐクリスマス・イヴだと言うのに、彼女さえいない孝祐は、これも毎年のように、聖夜を一人身で過ごすはずだった。しかし、そんな彼の元へと突然やってくる一通のメール。それは、どこの誰とも解らない人間から送られてきたものだった。その文章には、「R・T・R・」という謎の文字が記載されていて――。

第一章／疑惑、決意、開始（R・T・R・1～5）

/ R・T・R・1

——優勝賞金、一千万円。

その文字を目の当たりにして、どうすればそんな巨額の賞金が入るのか、その入手方法が気にならない人間なんて、恐らくどこかの億万長者やら成金野郎みたいな、金に困らない人生の勝ち組達だけだろう。

青年、戒道孝祐^{かいどうすけ}は、その金額に目を奪われた人間の一人だった。

「R・T・R・——一夜限りの賞金争奪戦、最も優秀な成績を残したものに、賞金として一千万円を支払う……。何だこれ、新手の詐欺メール、って奴か？」

仕事を終え、自宅でのんびりとテレビを見ていた孝祐、その携帯電話に突如として送られてきた一通のメール。

それには、こう記載されていた。

「R・T・R・」参加者募集

12/23 09:00

一夜限りの賞金争奪戦！ 最も優秀な成績を残したものに、賞金として一千万円を支払います！ なお、応募締め切りは明日午前0時までとさせて戴きます。参加表明をなさる方は、このメールアドレスまで、ゲームネーム、性別、年齢、最寄の地下鉄駅名を記載の上、ご返信下さるようお願い致します。

【ゲームマスター】

「ゲームネーム、って……ようはハンドルネームのようなものか。しかし、本名登録しなくて良いってのは良く解らないな。詐欺メールにしてはおかしい部分が多いし、この最寄の地下鉄駅、ってのは

一体何なんだ？ それに、最後の――」

ゲームマスター、と言う文字で文章は最後を迎えている。

孝祐は今年で二十五歳を迎えている、れっきとした社会人だった。『ゲーム』と言う単語とは、少しかり縁が遠い。こんなメールが彼の所へ送られてきた理由は解らないし、この文章だけでは、どう考えても何を行うのか理解する事は出来なかった。

賞金一千万、その額は十分に魅力的だし、何より詐欺メールとしては不明瞭な部分が多々ある。これなら万が一騙されたとしても、損害は出さないで済むだろう――孝祐は頭の隅で、そんな事を考えていた。

締め切りまで、あと約三時間。

彼の理性は止めておけと叫んでいるのに、どうしても賞金の事が脳裏から離れない。

「一千万だろ、一千万なんだよなあ。一千万、いつせんまん……デカいよなあ、一千万円なんて額は……」

彼がこうにも悩んでいる理由は、何も金額が大きいかと言う理由だけではない。

正直に言つて、戒道孝祐は貧乏だった。

こうして毎日のように働いてはいるが、サラリーマンへの道を二十代に入った瞬間に諦めた彼は、安定のない職を渡り続けながら、どうにか生活をこなしてきた。両親は田舎の山中で老後の年金生活を行っているし、仕送りを送って貰えてもせいぜい小遣い程度の少ない金額でしかない。毎日が金に負われる日々、借金こそ無いものの、このままでは何の楽しみもなく一生が終わってしまうかもしれない――孝祐にとって、それだけは耐え難い未来の姿なのだった。

恋人もいないし、いたところで、結婚し家庭を築けるほどの甲斐性が彼には存在しなかった。

こんな平凡、いや、平凡より酷いかも知れない人生を、このまま続けたくはない。孝祐にとって、この一千万円と言う金額は、それこそ、そんな暗い墮落した日々を打破し得る可能性を十分に秘めて

いるのである。

チャンス

この好機を逃す手はない——孝祐は、未だ邪魔をする常識と言う名の自制心を、無理やり抑え付けた。

「どうせ続ける価値の無い人生……、それならここで一発、博打つてやるのも悪くはないってものさ。それに、もし詐欺だったとしても、無視すれば通るってどっかの偉い人が言ってたし。大丈夫、問題ない。俺にはどうしても金が必要なんだ——」

そうして、決断。

孝祐は、素早い指さばきで返信のメールを打つと、躊躇もせず、メールを送信した。

ゲームネーム——コウ。

性別——男。

年齢——二十五歳。

最寄の地下鉄駅——京都、東西線、二条駅。

このメールが全ての始まりであり、青年・戒道孝祐は、今年最高で最悪とも呼べる、最初で最後のクリスマスの夜を過ごす事になる。

R・T・R・1 /

/ R・T・R・2

戒道孝祐が、件のメールに返信した、次の日。

午後九時——昨日、メールが送られてきた時とまったく同じ時間帯に、そのメールは届けられた。【ゲームマスター】と名乗り、「R・T・R・」と呼ばれた、賞金一千万円を争奪するゲーム、その主催者からのメールである。

「R・T・R・」参加者の皆様へ

12/24 09:00

今回は当方のゲームへのご参加戴き、有難う御座います。さて、早速ですが、今日の午後十一時半に、とある場所まで集まって戴こうと思います。各自、参加応募時に記入して戴いた、最寄の地下鉄駅まで、今日の午後十一時までにお集まり下さい。駅構内に、黒服にサングラスを付けた使いの者が立っていますので、そちらまで、ゲームネーム、性別、年齢をお伝えの後、携帯電話をお渡し下さい。その後は、黒服の指示に従って行動して戴きます。なお、この時点で疑念を少しでもお持ちの方は、今回、このゲームへの参加は控えて戴いて構いません。以上の事項を踏まえた上、その携帯電話と着衣以外の物を一切所持せずに、最寄の地下鉄駅までお越し下さいますよう、宜しくお願い致します。

【ゲームマスター】

なんだこれは、と孝祐は思う。

一通目のメールから見れば、特に問題のない、幼稚ないたずらだとも取れる内容だったが、返信されてきたこの二通目のメールは、言うならば異常、その一言に尽きる。異常な程の怪しさ、嚴重なシステム——何をするのかと思えば、どこかへ連れて行くつもりらしい。ネットゲームでは無く、これは現実で行われるゲーム——つまりは、そう言う事だろう。

確かに、一言もそう言った事の記述は無かったし、孝祐自身、それが解らない事を前提としてメールの返信を行ったのだ。それに関して言えば、特に文句は無いと言うのが孝祐の意見であり、問題点は別にそんな部分ではない。

問題は、この異様なまでの嚴重さ。確かに、これぐらいの事をしなければ、全てにおいてフェアではない。そこは孝祐にも解るし、問題点と言える程の事項ではない。だが、黒服の人間と言う文字が、どうしても孝祐には気になった。

「黒服のサングラスって言ったら、ヤクザだかマフィア、そういう

人間じゃないか。いや、実際それだけではないんだとしても、こいつはどう考えたって怪しすぎる。一体、どこの誰がこんなゲームを企画した？ その意図はなんだ？ やはり、詐欺……？」

気にはなる、なるのだが、それで参加を取り止めようなんて考えに、孝祐は今更至る事など出来ない。決断したのは、彼自身だ。それに、何も理由はそれだけではない。

「この時点で疑念を少しでも持った人間は、参加を取り止める事が出来る……か。何故こんな事をわざわざ記述している……？ 誰だって怪しいと踏めば、そんな事が書いてなくても、自分勝手に参加を止めるだろうに。いちいちそれを書く、って事は、詐欺のような事をする意図はない、とも取れるが……いや、そこまで読んだ上で敢えて書いているのか？ ああ、くそっ！ 深く考えてもキリがない！」

孝祐にとって、相手側——その「ゲームマスター」とやらに、詐欺紛いの行為をする意図があるのかどうか、そんな事は考えても意味が無い。重要なのは、本当に賞金が出るのかどうか、そのゲームが実際に行われるのだとして、それに参加出来る権利を得た孝祐が、実際にゲームで勝利した時、賞金の一千万円を手に入れる事が出来るのか。それが、何より重要だった。孝祐はゲームに参加しない、と言う選択肢などすでに頭から排除している。ただ、本当に疑念が残るとするなら、賞金を手に入れられるか、その一点のみなのである。

孝祐は、メールの文章、その最後辺りに注目する。

「携帯と服以外、何も持ち込むな……」ってのは、一体どういう意味だろう。携帯さえ、黒服に渡すんだから、結果的に手ぶら、何も所持せず丸腰って事だ。参加者全てがその条件を呑まなければいけないんだから、別に参加者同士で危険な事はない……いや、そうじゃない、これは……ゲーム参加を前提に考えれば、ごく普通、当たり前前の事じゃないか」

そう。今回のこのゲーム、孝祐にとっては一体何を行うのか、知

った事ではない。ではないが、参加者が複数に存在するゲームと考えると、その全てが公平でなければ、意味がない。各自の所持品などは、そのまま、ゲームに対する有利・不利に繋がる——そう考えれば、その設定自体は納得出来るものがある。

つまり、逆に考えれば、このメールの送信者は、本当にゲームを行うつもりがある、そういう風にも取れる。もちろん、丸腰にして人質にしたりなど、ネガティブな方向へと物事を考えれば、そちらもそちらで納得は出来るし、事実、本当はそういう意図なのかも知れない。

だが、孝祐はあくまで、このゲームに参加する一人の人間として、すでに覚悟を決めていた。これほどの内容だとは思わず、少し悔っていた面はあるが、それでも決断に変化は有り得ない。

これは、戒道孝祐にとって、一生一大の博打。全てを投げうる覚悟を持った男の、最初で最後の賭けなのである。

「こっから、地下鉄二条駅までは、歩いて五分とかからない。なら……一応、万が一の為に、遺書でも残しておくか？ 大袈裟ではあるけど、必要だろうな。後は、精密な検査が行われると予想して、服装にもしつかり気を使っておかないと。もしも、着衣以外の物が見つかって、ゲーム参加の資格を剥奪……なんて事があつたら、いくらなんでも馬鹿丸出した。後悔しない為にも、どうせなら、やれる事は全てやっておきたい」

そうして、孝祐は参加を決意。出発の準備に取り掛かった。

念の為、携帯電話に入っている全てのアドレスを紙に写し、消去——さらに、メールや着信履歴などの情報も、この二通のメールと自分が送信した参加表明のメール以外、全て削除する。電池切れを起こさないよう、充電機に繋ぎ、孝祐は遺書作成に取り掛かる。

しかし、一言に遺書といっても、別に死んだ場合のものではない。もちろん、孝祐にとって今回の事に不安が無いわけではないが、死ぬつもりなんて、それ以上に有り得ない。この遺書は、彼にとってのいわば伝言である。ただ、万が一の状況を想定した上での、彼の

残すメッセージ。具体的に言えば、今回、一つのメールから始まるこの出来事のあらましを、書き残す——それだけである。

R・T・R ― 謎の主催者、【ゲームマスター】によって行われると言う、賞金一千万を賭けた争奪戦^{ゲーム}。

孝祐は、短い文章の遺書を書き終わると、服を全て脱ぎ捨て、バスルームへと向かう。とは言っても、特別広いわけでもないし、どこにでもあるような、小さな一人用の風呂場に変わりはない。

バスルーム、その洗面台の前で、孝祐は自分の姿を確認する。

「二十五にもなつて、まともな職にさえ就けない俺が、まさかこんな博打に乗るなんて。周りの人間からすりゃ、馬鹿野郎だって思われるんだろっな……、だけど——」

それでも、退けない理由がある。

「……、やってやるさ。全てを変えられるのなら、俺は、この手でそれを成し遂げてやる」

R・T・R・ 2 /

/ R・T・R・ 3

十二月十四日、午後十時五十分、ジャスト。

規定の時間である十一時まで、残り十分。戒道孝祐は、自宅のアパートから少し歩いた場所にある、地下鉄二条駅、その改札口までやってきていた。駅構内へ階段を下って脚を踏み入れた瞬間、孝祐はとある一つの違和感に気が付く。

「人が……いない……」

しんと静まり返った駅構内、そこには一般客の姿がまったく見当たらず、さらに言えば、駅係員さえ周囲にその姿を見せない。

その場に居るのは自分、そして――

「あの柱の前に立っているのが、例の案内人か……？」

改札口横、切符売り場の前にある柱、その前に一人の黒服が立つ

ていた。サングラスをかけた男のようである。他に人影は見当たらないし、孝祐は、それが件の案内人なのだと判断した。ポケットから携帯を取り出し、黒服の元まで駆け寄る。

近寄る孝祐に気が付いたのか、黒服の男は、じつと微動だにしない。その体躯ごと、孝祐へと振り返った。見れば、身長百七十センチ程度の背丈を持つ孝祐よりも、ずっと背が高い——恐らく百八十五、いや、百九十あるのかも知れない。それほどの背丈を持った黒服にサングラスの男となると、孝祐だって、多少ながら怖気づいてしまうのも無理はなかった。

「……ゲームネーム、コウです。年齢は二十五、性別は見ての通り男です。この携帯を渡せばいいんですよね？」

孝祐が右手に持った携帯を差し出すと、目の前の男は黒いサングラスをギラつかせ、それを手に取る。取った瞬間、携帯を片手にいじり始めた。恐らく、メールのチェックだろう。孝祐が本当にゲーム参加者なのかどうかの、最終確認。

しばらくして、黒服は折りたたみ式の携帯を閉じ、そのまま手持ちの鞆へと突っ込んだ。どうやら返しては貰えないようである。孝祐は内心、こうなることを予測していたとは言え、やはり不信感だけが無駄に募っていく。

「確認しました。そのまま両手を組んで頭の後ろへ回した体勢で、こちらの指示通りに動いて戴きます」

ドスのきいた声色で、黒服が孝祐に向けてそう言った。

どこまでも嚴重、行き過ぎていくくらいの警戒心。孝祐は、警戒するのはこっちの方だ——と、心の内ではやきながらも、言われた通り、両手を組んで頭の後ろに回し、そのまま歩き始めた黒服の背中を追う。

改札口は、切符を入れてさえいないのだが、二人が通り過ぎても何故か反応しなかった。駅員がいない事もそうだし、絶対に何かがおかしい——孝祐はそんな事を考えながら、しかし考えるだけ無駄だとすぐに思考を切り捨てる。

主催者側が何かをしている、それだけは確実だ。これだけ大掛かりな準備をするのなら、少なくとも多大な金や権力が必要になる。ならば、もう答えは見えているようなものだった。

（……ゲームマスターって奴は、どうやら本気でゲームを始めつもりみたいだな。それなら問題はない、俺はただ従うだけ……ここでもヘタな考えや行動を起こしても、何も始まらない。信じるんだ、そして確信しろ。ゲームは行われる。これだけ大規模な下準備が行われているのなら、もう疑う理由は無くなったはずだ——）

電車は、まだそこにはない。

時計が無い為、孝祐に現在の正確な時間は解らない。だが、あと数分で十一時になるのは解りきっている。もし、時間厳守が基本事項なのだとするなら、電車は必ず、それと同時にやってくるはずだ——孝祐はそこまで考え、そして、遠くから微かに聞こえる電車の走行音を耳にした。

左隣に立つ黒服は、何も喋らない。

これから行われるゲームについて、何かを聞き出したい衝動に駆られながらも、孝祐は、それを押さえ込む。黒服はあくまで案内人そして監視役——今、孝祐に求められているのは、ゲームに参加するプレイヤーとしての資格。強い警戒心を持っているのであるう、ゲームマスターに対し、自分がどれだけ信用に値するか、ゲームへ参加するほどの人間なのかどうか、それを試されているのだ。

もちろん、そんなものは考え過ぎなのかも知れないが、孝祐は、ここまでくれば徹底するべきだ、と踏んでいる。少なくとも、こうした黒服や駅を占拠しての大掛かりな出迎えや、二通目のメールに書かれた文章、ルールの奥に隠された、相手側の警戒心——それは紛れもなく本物。疑いようのない、確実なものだった。ならば、孝祐は自分に出来る最善の行動を選んで実行するだけである。

いくら勝たなければ賞金が手に入らないゲームだと言えど、今からその勝ち負けに対して思考すると言うのは大きな間違いだ。ゲームが行われる事が決定事項なのとしても、孝祐がそれに参加でき

なければ、それは勝ち負け以前の問題でしかないのだから。

「さあ、電車が着きました。乗ってください。三十秒で、この列車は自動発車します」

黒服が、到着した電車へと孝祐を誘導する。

見かけはどこにでもあるような、普通の地下鉄を走る電車にしか見えない。だが、その中に人影は皆無。静まり返った電車内が、何故か不気味に感じられる。

孝祐はそそくさと電車に乗り込むと、扉付近の座席に腰を落とす。すると、彼の目の前に黒服が立ち、鞆から何かを取り出そうとしていた。

「……ここからは、失礼ですが、目隠しをさせて戴きます」

「なっ——め、目隠し？ どうして？」

あまりにも予想以上の展開に、思わず孝祐は動揺し、言葉を洩らす。不安を見せてはいけない、それだけは悟られるべきではない——そう思っていたが、ここまできて、それを曝け出してしまふ。

だが、黒服は特に顔色ひとつ変えず、むしろ申し訳なさそうな口調で、

「これも、当方の主……ゲームマスターが定められた規則ですので承諾戴けないのであれば、ここで降りて頂いても構いませんが」

それだけ言つて、黒服は鞆から取り出した黒い布のようなものを、孝祐の目の前に、その両手で提示する。

目隠しをする、という事は、どこへ向かうのか解らない——少なくとも、今いる駅だけならば解つても、そこからどこへ連れて行かれるのか、皆目検討が付けられない、そう言う事だ。なるほど、本当に警戒心の強い相手だ——と、孝祐は思う。だが、この程度の事でゲーム参加を取り止めようと思うほど、孝祐は馬鹿ではない。今に始まった事ではない、この程度は全て予想の範疇だ——そう思い行動しなければ、とてもではないが、このゲームに参加する事は出来ないだろう。

「解りました、従います。でも、どうせなら、きちんと隙間なく目

隠しをして下さいよ」

「……はい。それは、勿論」

黒い布のようなものが、孝祐の視覚を遮断する。

少しして、扉が閉まると共に、孝祐を乗せた電車が発車した。

R・T・R・3 /

/ R・T・R・4

目隠しをされ、どこへ向かうのかさえ解らない状態——否応にも襲い掛かる不安感に苛まれながら、戒道孝祐は、走行していた電車が、少し荒々しく停車した事に気が付いた。

ガタン、と電車が揺れ、扉の開く音が聴こえてくる。孝祐は、目的地に着いたのか、と立ち上がった。だが、今の孝祐に周りの景色は見えない。一体ここがどこの駅なのか、ここからどこへ連れて行かれるのか、彼には知るよしもないのである。

黒服の男だろう、ごつい手が孝祐の右腕を掴み、外へと誘導するように歩き出した。それに黙って従いながら、孝祐も脚を踏み出す。電車を降りると、後ろで扉の閉まる音がした。そして、ゆっくりとその場から立ち去っていく電車——孝祐は、これで後戻りは出来ない、と実感する。

「そのまま、こちらの誘導に従って下さい。ここからまずは、外へと出ます」

黒服の声に無言で頷いて、孝祐は駅のホームから外まで出る事となった。

相変わらず、このことも知れない駅でさえ、人の気配がない——それは、目隠しをしていても感じられる。今更、一体どこまで連れて行くつもりだ、と喚き散らすつもりなど孝祐には毛頭ないのだが、それでも、やはり不安は隠しきれない。

次第に感じられる、外の空気。冷たい風が、孝祐の身体に突き刺

さるように吹いていた。震える身体を、自由な左腕で庇うように抱え込む。

寒いから震えている——本当に、そうなのだろうか。孝祐は、少し疑問に思う。今感じているこの不安感、これこそが、震えの正体ではないか——どちらが真実なのかは、当の本人である彼にも解らない。

ただ言える事は、ここまできて怯える意味はない、それだけだった。

もう、すでに彼は道を歩み始めている。引き返せない、崖っぷちのような危険な道を。

「……ここからは車で移動します。他の参加者もここに集まっていますが、ルール上、目隠しは外せませんので、ご了承を」

「他の参加者……？」

地下鉄、駅構内から外へと出る階段を昇り、地上へと出た瞬間、孝祐は肌に数多くの人間の気配を感じ取った。誰一人として喋ってはいないが、確かに、そこには人がいる。恐らく、自分以外の参加者も全員、目隠しをされているのだろう。目の見えない不安感が、参加者達を黙させている。それだけではない——何か、異様なまでの張り詰めた空気が漂っているような、そんなものを孝祐はその身で感じていた。

ふと、右腕を握っていた、黒服の手が離れる。

特に力強く握られていたわけではないのに、何故だか妙な開放感があつた。

「十一時組はこれで全部です。十時半組と同時に運びましょう」

「ああ、それではこちらの組から先に乗り込ませて貰おう。彼等もこんな冷たい夜風の中で立ち往生しては、寒いだろうしな」

「解りました、任せます。……聞いている通り、コウ様とその他三名の方々は、十時半到着組の後に続く形で車内へと移動して戴きます。それまでしばらくお待ちを」

コウ、とは孝祐のプレイヤーネームである。十時半組やら十一時

組という単語が少しばかり気になったが、単純に考えれば、駅まで呼び出された時間帯が、参加者によって違うのだろう。確かに、全てを同時に一つの場所まで連れてくるのは難しい。そうして何度かに分けたほうが効率的なのだろう。だとすれば、孝祐は待ち時間の最も少ない十一時組に選ばれた、という事になる。少しツイてるな——と、どうでもいい事を考えながら、孝祐は、ふと黒服の言葉思い出していた。

（……ん、待てよ。俺以外に、十一時組がいる……三人？ まさか、同じ電車に乗っていたのか？ まったく気付かなかったが……いや、車両が違えば気付けるはずもない、か。にしても、十一時組だけで俺を含めて四名って事は、参加者は案外少ないのかも知れないな。無理もないが……、これはこれで好都合だとも言える。ゲームの敵は、少なければ少ないほどに越した事はないんだからな）

黒服は誘導の手伝いに向かったのか、近くにその気配は感じられない。ただ、何人か、恐らく同時期に集まった十一時組の参加者達——それが、孝祐の近くにいたようだった。目が見えないのは少し辛い、今出来る事といえば限られている。

孝祐は少し躊躇したものの、特に注意をされているわけでもない——そこまで考え、他の参加者とのコンタクトを取ろうという考えに至った。

「そこにいるのは、俺と同じ参加者なんだろう？ 俺は戒道——いや、プレイヤーネームで名乗ろう、コウって呼んでくれればいい。もし喋れるのなら、返事をしてくれないか」

孝祐がそれだけ呟いて、少しの間が経つ。

やがてそれに応えるように、一人の参加者が返答をした。

「……わ、私、アヤノです。プレイヤーネームで、アヤノ。驚きました、まさか目も見えないのに話しかけてくる人がいるなんて」それは紛れもない、女性の声だった。

アヤノと名乗った女性の声は、どこか震えている。

「僕、サイです。良かった、もう緊張で息が詰まりそうだったんで

すよ。コウさんにアヤノさん、ですね。どうぞよろしく」

そして、二人目——まだ幼さの抜け切れていない、少年のような声。

サイの様子は、アヤノと違って特に怯えた事もなく、どこか平常心を保っているように感じられた。

「アヤノとサイ、だな。覚えたよ、よろしくな」

「あ……よ、よろしくお願いしますっ！」

そして。

「……………」

三人目は、喋らなかった。

警戒しているのだろう——孝祐はそう考え、いないものとして扱う事にした。

「早速、率直に聞かせて貰いたいんだが、二人は今回このゲームについて、何か少しでも知っているか？」

孝祐は、黒服相手に聞き出したくても出来なかった、一番知りた情報に探りを入れる。アヤノとサイは、何か知っているのではないか——まさかとは思うものの、確かめずにはいられない。

だが、帰ってきた返事は、至極当たり前のものだった。

「僕は知りません」

「私も、知らないです……ごめんなさい」

「……だろうな。知っていれば、それだけで有利だろうし。ここまです警戒心の強いゲームマスターが、まさか不公平を持ち出すとも思えない。そうだな、この質問は忘れてくれ」

「でも、本当にゲームをするつもりはあるみたいだ……という事ぐらいなら、僕にだって解りますよ。最初は半信半疑でしたが、今ではすっかり、早くゲームが始まらないかってドキドキしているんです」

「わ、私は……まだ、少し怖いです。でも、ここまで来ちゃったから……」

「そうだな、ゲームは必ず行われる。ここまできた俺達は、もう後

戻りは出来ないんだ。あとはお互いに、全力を尽くして、賞金を手に入れるだけの事さ」

「ええ、あくまでも僕達は敵ですから。だけど、ここでこうして出会えたんです。もしぶつかる事があっても、互いに悔いのないよう、正々堂々と戦いましょう」

「ああ」

孝祐は頷き、それが最後の会話となった。会話をしている内に、別グループの誘導が終わったのか、黒服の男が近寄ってくるのが解る。

「お待ちせ致しました。今すぐに、車内の方へ乗り込んで戴きます」
黒服に背中を押され、孝祐達、四人の参加者それぞれが順番に車内へと乗り込んでいく。車——というから、普通の中型車を想像していた孝祐だが、実際はかなり大きい——恐らくバスのような乗り物だろう——と、孝祐は乗り込んだ瞬間に感じていた。

やがて全員が乗り込んだのか、椅子へと腰掛けた孝祐、その他ゲーム参加者達を乗せた車が、動き出す。

現在の時刻は、午後十一時二十三分——集合時間である三十分まで、あと七分を切っていた。

R・T・R・4 /

/ R・T・R・5

車を降り、黒服に連れられ歩くこと数分、孝祐の視覚を塞いでいた目隠しの黒い布がようやく外された。

だが、そこに光はない——暗く、周りにいるのであろう参加者の顔さえ見えない。結局、目隠しをしている事に何ら変わらない状態である。

どこかの建物内だろうか、外の寒さはすでに感じられない。広い空間なのだろう、そこまで窮屈感を感じられないが、この暗闇と言

う状況が、孝祐を含めた参加者達の緊張を増幅させる。

その場でわらわらと参加者達が立ち往生する中、きいん、という音がした。それに続くように、ひとつの咳払いのような声。

『——皆さん、初めまして。この度は、当方主催のゲーム「R・T・R」にご参加下さいまして、有難うございます。わたくしは、今回の主催者、ゲームマスターです』

途端、ざわめく声。唐突なゲームマスターの登場に、参加者達は驚きを隠せない。もちろん、それは孝祐にとっても同じ事だと言える。

ゲームマスターと名乗る主催者、その声は、機械音声で合成されているようだ。男か女か、それさえ判別が付けられない。

『それでは、まずはここまで何の疑いもなく、もしくは、乗り越えてやってきた十三名の勇者達に、わたくしから激励の言葉をかけさせて頂きます。おめでとうございます、あなた方、計十三名の皆様は見事、賞金一千万という額を賭けた一夜限りの争奪戦、「R・T・R」に参加する事が出来ます！』

おお、と、周りから奮起の声が聴こえてくる。孝祐も声には出さないが、内心ではガッツポーズの一つでも決めたいくらいの喜びを噛み締めていた。

十三名の参加者、一夜限りで行われる、賞金一千万円を賭けたゲーム——自分が今その土俵に立ち、プレイヤーとして存在している事に対する喜び。十三人と言う数の中、その一人に自分がいるという優越感。選ばれた人間だけが得られる恍惚感。孝祐は、せめて右手を握り締め、小さく口元を歪める。

『さて、早速ですが、まずは先に伝えて置かなければならない事があります。今回のゲーム、そのルールについてです。まず、ゲームの名称である「R・T・R」とは、予想されている方もいると思いますが、とある英語名の略称です。今回、この「R・T・R」をプレイして戴くに当たって、まずは、そのゲームの趣旨について知って戴く必要があるでしょう』

R・T・R——孝祐自身、この単語にどんな意味が隠されているのか、初めから疑問ではあった。恐らく、ゲームの内容自体を現す、何かの略語。そこまでは考え至ったものの、それがどんな言葉の略称なのか、そこまで行き着く事は出来なかった。元々、ゲームという単語自体に縁の遠い孝祐は、どんな事が行われるのか、略称の意味は何なのか、全て解らない、予想さえ出来ない状態でここまですてきたのである。

車へと乗り込む前、少し会話した二人のプレイヤーであるアヤノとサイでさえ、まったく解らない様子だったし、孝祐にそれが解るわけではないのだが——さて。

一体どんな意味を持つのか、期待と不安を抱えながら、孝祐は息を呑んだ。

『ところで皆さんは、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム、と言うゲームをご存知でしょうか。もしくは、ペンシル&ペーパー・ロールプレイングゲーム……外国の方なら、普通のロールプレイングゲーム、で伝わるはずですが、この国の方々なら、ロールプレイングゲームと聞けば、家庭で遊べるような、テレビゲームをご想像なさるでしょう。略称でR・P・G——そういった類のものとはまた別に、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム、T・R・P・G・またはT・T・R・P・G・と言うものが存在します』

何を言っているのか、その説明に何の意味があるのか、孝祐には理解出来なかった。

ただ、何かの前置きだろう——孝祐はそう考え、黙って声に耳を傾ける。

『ここまで言えば、ゲームに通ずる方なら予想出来るかも知れませんが。今回、皆様に行って戴くゲームは、そのT・R・P・G・なのです』

(……おいおい。まさかルールさえ知らない俺に、いきなりそんなゲームをやれって言うのか……？ 確かに何をするのかは知らされていなかったが、名前を聞いて想像も出来ないゲームで勝て、って

のはいくらなんでも——」

『……ですが。もちろん、ただのT・R・P・G.ではありません。ルールは基礎となるものは踏襲しています……が、まったく同じではありません。賞金一千万を賭けた、これは、いわばあなた方にとつての戦争だと言つても過言ではないでしょう。そんな舞台に用意するゲームが、どこにでもあるようなごく一般的なゲームでは、興醒めも良い所だとわたくしは思います。ですので、今回こちらが用意するゲーム「R・T・R・」は、あくまでT・R・P・G.を基礎とした、まったく別のゲームに仕上がっております』

室内に困惑の空気が広がっていく。これには誰もが動揺しているのだらう——孝祐は、その空気を肌で感じ取る事で、逆に一種の安心感を得ていた。ゲームを知っている事での有利・不利が生まれる事は避けたい。ならば、誰もがプレイした事のないゲーム、各プレイヤー達の立つ土俵を同じくしたゲームでなければ、公平だとは言えないからだ。

『ルールについては、この後、詳細を記載したルール・ブックを各自、黒服から手渡しされる手はずとなっております。現在の時刻は午後十一時、四十三分——日付の変わる午前0時をゲームスタートの合図とし、それまで、各自ルール・ブックに目を通して戴きます。また、この場所よりさらに進んだ場所に、プレイヤー一人につき一つ、小部屋を用意してあります。あくまでゲームスタートまで互いの干渉を控えたい為の措置ですので、ご了承のほどを』

ここまで目隠しで連れてこられた理由、そして、この場が僅かな光さえない完全な暗闇に包まれた空間なのは、その為だらう——孝祐は予想していたものの、やはりこの主催者は徹底している——そう感じ取った。

だが、それでも一つだけ穴があったのだ。駅から出た時、黒服が僅かの時間、立ち去ったあの時——他のプレイヤーと干渉出来る、ほんの少しの隙間。アヤノとサイ、あの二人と孝祐は確かに会話を交わした。姿さえ見えなかったものの、これは大きな事実だ。

（ここまで徹底して、嚴重さを欠いていないように見えるが……別に、完璧じゃないんだ。主催者であるゲームマスター本人が、いくら警戒し、公平さを作り上げようと努力しているのだとしても……絶対、どこかに穴が生まれる。そして、それがプレイヤーにとってのアドバンテージに成り得るはずだ。すでにここに集まった十三人は、参加が決定している。あとはここから、どうやって他のプレイヤーよりも先に抜きん出る事ができるか——戦争、つてのは、あながち悪い例えでもなさそうだな。ゲームマスター……！）

そう。いつまでもゲームマスターに怯え、参加資格を失う事に足を止めている暇はない——踏み出さなければならぬのである。ゲームに参加する事はすでに決まった。ならば、ここからは全身全霊——自分にあるもの、使えるものはすべて使って、手段を選んで躊躇する事なく、ただ勝利だけを考え行動する、言うなれば兵士のように振舞わなければならない。

孝祐は勘付いていた。このゲーム、敵は自分以外の十二名のプレイヤーだけではない。主催者であり、全てを支配するゲームマスターこそが、真の壁なのだと。

『それでは、そろそろ今回のゲームである「R・T・R」、その名称について、お話ししましょう。先程にもお伝えした通り、テーブルトーク・ロールプレイングゲームを模したこのゲームですが、作りはまったく別物です。——名付けて、リアル・トーク・ロールプレイングゲーム。略称、「R・T・R」。これは戦争です。参加者同士が協力し合い、もしくは争い合う、現実世界でのコミュニケーション・ゲーム。プレイヤーはあなた方十三名。そして、そのコマとなるのは、プレイヤーであるあなた方自身なのです』

第一章／疑惑、決意、開始（R・T・R・1）5（後書き）

皆さん初めまして、あるかぎり有華桜です。

本作は、ミステリー小説でも、推理小説でも、恋愛小説でもありません。

もちろん、現代が舞台なのですから、ファンタジー小説とも言い難いところです。

ではどんな作品なのか？

それはこれからの展開を見て戴くとして、一応、作者が「これだ！」と言うジャンルを提示するのであれば——エンターテインメントである、というのが一番しっくりくる位置付けだと思っています。

連載小説、その第一作目となる「R・T・R・1」第一話、いかがでしたでしょうか。

まだまだ始まったばかり、面白くなるのはこれからですが、もし続きが少しで気になって戴ければ、執筆者としては本望です。

連載ペースについてはまだあまり決めてはいませんが、是非、次の更新時も宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2166d/>

R.T.R.

2010年10月28日02時41分発行